

精神科臨床実習におけるプロセスレコードの 導入による学習効果と患者の状態の観察

松本レツ子¹ 勝野久美子¹ 金井田文恵² 内矢 洋子²

要 旨 精神科看護実習において、3年間にわたり同一患者を受け持つ看護の経過において、患者の対人間関係に改善がみられ、学生も患者の人間性をよく理解し、学習効果の向上がみられた。この原因の一つは、プロセスレコードを学生が作成しそれを検討して、患者への対応を考えた結果であろうと思われる。また長期入院の精神病患者にとって若い健康な学生とのふれあいも、刺激材となって対人間関係の変化となったと考えられる。精神科看護実習においてプロセスレコードの学生による作成は単に学生に看護技術の習得にとって重要であるばかりではなく、学生実習が患者の状態の改善へ導けたことは、看護教育上からみて、極めて重要なことである。

長大医短紀要4：1-8, 1990

Key words : 信頼, 受容, 尊重, 学習, 人間関係

はじめに

看護領域において、患者と看護婦の相互作用の形成過程（プロセス）を記録したものをプロセスレコードという。このプロセスレコードを分析検討することは、患者と看護婦の対人間関係の改善の対策を立てるうえで、重要なことである。

プロセスレコードはH. E. ペプロウ (1952) により看護の分野にとりいれられ¹⁾、また外口 (1967) は、これを日本で初めて紹介した。臨床実習において、プロセスレコードを作成させることは、学生が患者の看護の現場において、コミュニケーションをとる技術を習得す

る重要な方法であるとのべている^{2,3)}。

一方松本ら (1989) は精神科臨床実習において同一患者の3年間にわたる学生の看護からも、患者の学生への対応が改善されるとともに、学習効果も向上したことを報告した⁴⁾。この原因の一つはプロセスレコードの作成により学生の理解度がよくなったのではないかと思われたのでプロセスレコードの内容について検討した。その結果について報告する。

患者概要

患者は昭和9年生の女性で、昭和36年のとき失恋が誘因となって不眠、不穏状態におちいり、市内のクリニックで治療をうけた。

1 長崎大学医療技術短期大学部看護学科

2 長崎大学医学部附属病院精神神経科

この詳細は松本ら（1989）が報告している⁴⁾。

調査方法

本短期大学部看護学科の精神科実習の概要も本学の紀要第3巻に報告した。今回の調査も同一患者を継続して受け持った昭和61～63年度の3年間の学生26名にプロセスレコードを記録させた。

プロセスレコードの記録様式（表1）。様式のそれぞれの項目について患者との間に生じた言葉や表情、あるいは両者のやりとり（相互作用）について、記録のゆるす限り逐語的に順をおって記録させた^{2, 3)}。

精神科実習の実際

入院生活のなかで、患者に必要な体験を与え

なければならない。この学習体験は患者が人々との関係をもつ過程で得られるものである。患者をとりまく対人関係に焦点をあてているのも、患者が行動様式を身につけ、新たな観点から自分の考えかたをみつめ直す、自分のもつ問題に取りくめるような、看護婦の働きかける技術、すなわち人と人との相互作用に関心をむけていく、これが看護援助である。看護の機能は、「自分の観察結果によって判断する人であり、行動様式に介入する人である」とペプロウはいつている⁵⁾。

看護婦と患者との関係は、看護婦の判断力により左右されるが、患者のニードを満たすには、集団のなかの一人一人の差異を認めて接することのできる「対応の技術」の習得が不可欠である。さらに患者同士の相互作用に

表1 プロセスレコード記録様式

病棟名 患者氏名 実習 日目 プロセスレコードをとった理由		性別・年齢	学校名 学習者氏名
①患者の言動	②看護学生の言動	③考 察	④評 価
(a) 看護学生が患者に出会った ・時（月 日 時） ・場所 ・患者について：患者はどうしていたか、1人でいたか、なにをしていたのか、その周囲の患者の様子についても記す (c) 看護学生のことばや態度に対する反応を記録する	(b) 看護学生がはじめてかけたことば「 」そのとき感じたこと、行ったことを記録する (d) それに対する看護学生の反応を記録する		

介入する方法も知っていることが、看護婦として重要なことである⁶⁾。

対人関係技術を習得して、患者の観察ができる対応についての課題をもって実習を行った。プロセスレコードでとりあげ、再構成した時、患者との違和感の気づきや、患者の問題行動様式のなかで用いられる防衛の型から、その経過を通して次の3項目に注意した⁶⁾。

1) 学生が対人関係の技術を活用できないで接近するとき。

- ・患者が不快な状態を示したときには、そこから逃げ出そうとする防衛反応をとり、問題を避けてしまう。

- ・患者は無関心な態度を示すとき、敵対しているときの状況では、心の中を表らわず絶望的な気持ちをもつ。

- ・患者との違和感があるとき、学生はどうしてよいか分からなくなり、患者は不安にかられ、一層の不適切な防衛をする。

2) 学生が問題解決の新しい対人関係の技術が活用できて接近するとき。

- ・患者が何をコミュニケーションしようとしているのか、患者の当惑や、心の葛藤を表現させる。

- ・興奮患者との関係をもつことができる。興奮患者は他の人とのコミュニケーションをもちたがらないというイメージがあるが、何を訴えているか、表現を通して意思の疎通ができることを知ることができる。

- ・患者との情緒的な話題をだして交流をもつ。

- ・医師～患者関係を確立し、治療的な環境をつくり出すことができる。

3) 日常生活の自立への働きかけ。

- ・生活行動様式に患者の人間の価値観を印象づけるようなアプローチを行う。

- ・更衣、入浴、清掃などを積極的に行動しようとする患者に、その態度は尊重されていると感じさせること。

- ・立居振舞いにより患者に受け入れられて

いる経験をあたえること。

結果・考察

看護は患者の回復をはかる目的に沿って、計画的に行う必要がある。問題行動のなかで解決できる目標をあげ、患者が次の成熟した行動を体得する段階へと積極的に援助する。

外口らは、看護婦-患者関係の発展過程に各段階毎の課題、4つの主眼点をテーマとしてとりあげている⁶⁾。これにそって考察した。

昭和61～63年度までにとったプロセスレコードの結果を示した。

(1) 昭和61年度

学生への対応・第1段階(お互いに知りあう時期)

患者の強い抵抗と攻撃、単一の固定した要求・不満・疑問・拒絶。

患者の状態

不眠・拒食・拒薬・恋愛妄想・幻聴・徘徊・強い退院希望・身体清潔感欠如

プロセスレコードをとった理由、患者の言動とその看護場面。

① 患者が抑うつ状態なとき、励まそうと明るく話しかけたが、患者の反応が予想以上に暗い。そのときの自分の態度をふりかえる。

② 患者と並んで座り、どこかを見つめているので、話をしてかかわりを深めようとしたが、反応がなく、ついに怒らせてしまった。今後の接近について考える。

③ 和室の片付けを一緒にしようとした患者が、急に態度を変え命令調になり、拒否したのはなぜかを考える。

④ レクリエーションへの参加を誘いかけたが、無言、ベットでうつむいている。患者の援助の方法を考えたい。

- ⑤ 洗濯の途中、急に非常扉のほうへ行きドアに向かって話しかけた場面で、自分のとった態度と今後の援助のありかたについて考える。
- ⑥ 入浴介助をして、よく保清ができないので、援助をしようとしたが拒否された。私にできる援助は何かを考えたい。
- ⑦ 何度か会話につまったり、患者をイライラさせたので、言葉の遣いかたや、行動に対しての援助のあり方について考えてみたい。
- ⑧ 自室で座っていた患者が突然立ち上がり男子病室のほうに歩いていくので、どう対応すべきかを考える。

考察

- 1) 患者の会話に繰り返しや、否定的な部分が多くても、患者の気持を尊重し耳を傾けることに努力している。
- 2) 患者の不合理な言動に重きをおくより、患者の気持をくみとり、それに応じることに重点をおいて対応している。
- 3) 患者を訪室するときに訪室の理由を、はっきりさせて対応している。
- 4) 患者の敵意や、まくしたてる言葉は、私個人に向けられるものではない。患者のニーズが、そのような不適切な形でしか表現し得ないことで理解している。

受容的アプローチのなかで患者の人間の理解をベースにして、気持を尊重し、くみこんでそれに応じている。

また第1段階の対応の技術として「患者の要求の範囲内で話しかけるべきである」ということに忠実であったことで、患者との信頼関係も各々の学生ともに維持されていると考えられる⁸⁾。

(2) 昭和62年度

学生への対応・第2段階(なじみはじめる時期)

患者の執拗な不信感、懇願するような言い方などに気持を出しているが、依存することの表現ができない。

患者の状態

恋愛妄想・思考障害・「家にかえりたい」という要求をくりかえす。

プロセスレコードをとった理由、患者の言動とその看護場面。

- ① 午後訪室すると患者が買物に行くということで患者と私の話の内容が食い違い、訴えを正確に把握できなかった。
- ② 院内外出をしたがって病棟内でバックを持ってウロウロしているのに、看護婦と学生2人が付き添うというと、急に拒否的な態度になった患者の気持を考えてみた。
- ③ 非常扉の前にたち扉が開くのを待ちぶせているように見えたので、売店には今は行けないことを伝え、帰室を促したが、かえって興奮させてしまった。学生自身の気持ちのなかに不安があり、消極的であった態度を考えた。
- ④ 実習1日目、患者とコミュニケーションをとろうとして自己紹介したが、学生の受持ちを激しく拒否されてしまった。
- ⑤ レクリエーションでせっかく体育館にバレーボールの見学にいったのに、すぐ入口のドアをあけて「家にかえる」と言い出し外にでてしまった。離院しないように一緒について行き何とか帰そうと思い、道端の草花に話題を変えたことで、気持がかわったが患者の行動に戸惑いを感じた。
- ⑥ 入浴後、下着交換の時、今まで着ていた2枚の下着を1枚にして着替えない。患者のとった行動が理解できなかった。
- ⑦ 実習1日目に患者との会話ができなくて、沈黙の状態である。学生を無視して花の絵を書いている。コミュニケーションがとれず、戸惑った。

- ⑧ 退院要求の強い患者と売店にいき、「車で一周りして、すぐ帰ってくるよ。家にかえりたい」と何回もいう。

考察

1) 幻覚・妄想は、「自閉的傾向」「無感動」な患者に共通して観察される症状の一部で、なかなか軽減しない執拗な現象である。特異な行動パターンに学生は患者の言動に戸惑いがみられる。援助の方法がなかなか見いだせない。

2) 患者は自分の望みを満たすために看護者に頼り「家に帰りたい」とくりかえし訴える。その一方的な要求の仕方に、学生はその気持ちを、あるがままの状態、患者を受け入れようとして対応している。しかし現実には患者との気持ちのズレをどうしたらよいか、対応の技術ができていないことを感じている。

3) 患者が興奮したとき、本人の訴えていることをむやみに押さえず、その言動の意味をつかもうとしている。

幻覚・妄想をもつ患者は自分だけの世界に住んでいるため、自分だけに納得できる意味を特定の事物に与えたり、特定の行動を儀式的に振舞うことがみられた。これに対して学生は、問題行動を、患者の不安の表現とみて、その不安をなくし、相互の信頼関係をつくることによって、患者の現実への橋渡しをしたと考えて、その接近の方法により行動していた。

非言語的な行動 (1)黙ってそばに座っている。(2)患者の話を注意して聞きうなずく。(3)一緒に歩く。(4)肩に手をかけたりする。など現実的な行動をとっていることがわかった。

(3) 昭和63年度

学生への対応・第3段階(信頼しあう時期→自立への歩み)
患者の問題行動のなかに、学生の接近を部分

的に受け入れようとする態度の変化がある。行動様式は多様で複雑であり、患者に起こっている一見ばらばらな問題をよく観察してみると、表面的には状態の変化は、ないように見える。しかし内面的には、健康な部分での接触ができる行動もできている。

患者の状態

日常生活において、要求はするが、かたくなな感じはやわらぎ、感情表現についても以前のような強い口調ではない。

プロセスレコードをとった理由、患者の言動と、その看護場面。

- ① 白いバックをもった患者との初対面で、無表情ではあったが落ちついて会話できた。
- ② 患者が非常扉の前に立っているの近くと何もいわずデイルームに歩きだした。接近のとりかたがむづかしい。
- ③ 外泊がきまりデイルームに1人で座っている。話しかけると急に顔をそむけ、無反応の態度をとる。
- ④ 入浴のとき、身体を洗わずにいるので促すと、「よかと」と激しく拒否された。
- ⑤ 着替えを何日もされてないので汚れていた。着替えするように言うと、強い口調になり口論になった。
- ⑥ バスハイクで野外公園にいき、自由時間するとき、何回もバスで帰ると訴える。バスは今いないことの説明を繰り返してもまた言い出す。少したって「バスが来たら教えてね」という気持ちを訴えてきた。
- ⑦ 院内散歩にいった先の喫茶店から帰る途中、やや攻撃的に「学生は1人で帰ってよい。自分は今から家に帰る」といいだし、その対応に困った。その後穏やかに学生に「一緒に来んね」という。
- ⑧ 入浴後足の爪が長いことに気づき、どうして切らないのかと思ったので確かめたかっ

た。爪きりを渡したら素直に受け取り少し切ることができた。

- ⑨ 入浴したがる患者がやっと「入ろう」という素振りを見せながらも途中で引き返したりする。行動をどう解釈してよいか迷った。
- ⑩ 初日患者と院内外出し、帰る途中別の方の廊下を歩きだし、突然ガラス戸の所にいき5センチくらい開けたので、心が動揺した。そのあととの方と一緒に帰宅してほっとした。

考察

- 1) 自分の世界にとじこもっているように見えた患者が、自分の体験の中から現実的な質問や、行動に関連した話題と事実を、共通のものとしてもてるようになってきた。
- 2) 患者に接近する方法は、言葉で説明することより、具体的に一緒に行動して、患者自身に体験させることが大切である。患者は、自分の周囲の状況や事実を誤って感じとったり、ゆがんだ解釈をする傾向にある。そのときの対応によって患者を疑い深くさせたりする。混乱させない現実味のある行動をさせることが重要であると理解できた。
- 3) 患者を受容することは、誤った考えや、ゆがんだ解釈を全部許すことではない。患者が常識外れの言葉や不合理な表現をしても、そうせざるをえない状態であって、援助を求めていることを認めることである。患者と一緒にそれを確かめ、納得できるような環境に持っていくことが必要となってくる。

患者への接近の仕方によって、患者が現実的な表現や、行動をとることができるという認識を得ることができた。

まとめ

精神科看護実習において学生が、患者との信頼関係や疎通関係をもつことができた経緯をプロセスレコードにより検討した。

その内容を学生と分析する機会に、さらにロールプレイングを行い、ビデオカメラに撮り患者の気持ちを表現した。その時の患者の表情や、言葉のつかいかた、分からなかった表現や、行動について、グループで検討した。記述しても理解できなかったことが、話し合うことによって、場面の状況を再現する中で容易にそのときの自分の反応が浮かぶようになってくる。

患者が自己の存在を認識し、看護婦を受け入れて自立する力を自分で認めていく、看護婦と患者との相互作用の過程（プロセス）は重要なことである。患者が入院している現実を認め、はっきりと理解させることが自立への過程に必要である。

また学生は、相互作用を通して得られる患者との重要なコミュニケーションの技術を習得したと考えられる。

これらのことからプロセスレコードの作成が、患者の回復過程のなかで変化がみられ、学習効果をあげた大きな原因であろう。

患者の固定した要求が少しずつ変化していることに注目して、今後の看護の援助の姿勢と患者の日常生活のなかで、常に一緒に行動していることにあらためて注目したい。

患者は自分に向けられる関心や援助を第3段階の自立へのあゆみに向かっていても、依然として「抵抗」と「ためし」がつづいている。

慢性化した精神分裂病患者にとって、病院内での生活は、よき治療的な生活の場面であっても、患者の精神世界のなかで、豊かな情緒を育てることが不足がちであるが、学生との出会いにより、若い健康な人とのふれあいは、長期に入院生活をしている患者にとって新鮮

な刺激材である。これが患者の改善への過程へと導いた原因の1つであろう。

学生が患者との関係を築いていくなかで、不安や苦悩の解決をはかり、自立できるように社会で生きていく積極的な援助方法が、これからの看護の課題といえる。

学生の臨床実習によい環境とご指導ご助言をいただき、精神科看護の学習が有意義に展開できた長崎大学医学部附属病院精神神経科病棟の諸先生に敬意と感謝する次第である。

参考文献

1. H. E. ペプロウ著, 稲田八重子他訳: 人間関係の看護論, 医学書院, 東京, 1973, pp 323-326.
2. 金子光, 小林富美栄編, 外口玉子, 中山洋子・小松博子・中井久夫・山口直彦著: 系統看護学講座, 専門13, 成人看護学10, 医学書院, 東京, 1989, pp 98-1046.
3. E. ウィーデンバック著, 都留伸子他訳: 臨床実習指導の本質, 看護学生援助の技術, 現代社, 東京, 1972, pp 157-170.
4. 松本レツ子・勝野久美子, 金井田文恵, 内矢洋子: 精神科臨床実習の展開, 長大短紀要3, 1989, pp 79-85.
5. D. E. グレック著, 外口玉子訳: 精神科看護婦の役割, 総合看護4, 東京, 1976, pp 377-379.
6. 外口玉子, 外間邦江著: 精神科看護の展開, 医学書院, 東京, 1971, pp 85-109.
7. E. ウィーデンバック著, 外口玉子他訳: 改訂第二版 臨床看護の本質 患者援助の技術, 現代社, 東京, 1984, pp 73-83.
8. 外口玉子編, 稲田八重子・上岡澄子・田村真・外口玉子・舛田陸雄・渡辺忠雄・伊藤ひろ子・今村美智恵・高見安規子・羽山由美子・松沢博子・村田要子訳: 患者の理解《看護学翻訳論文集2》, 現代社, 東京, 1981, pp 185-206.

(1990年12月28日受理)

Observation of patients' conditions by means of process records
in psychiatric nursing practice and its educational effects

Retsuko MATSUMOTO,¹ Kumiko KATSUNO,¹ Fumie KANEIDA,²
and Youko UCHIYA²

1 Department of Nursing, The school of Allied Medical Sciences, Nagasaki University.

2 Department of Psychiatry, Nagasaki University School of Medicine.

Abstract When student nurses were assigned to the same patients for 3 years in the nursing practice of psychiatry, the patients showed improvements in human relations, and students benefited as they better understood the personality of the patients. One of the reasons for these improvements is considered to be the preparation and evaluation of process records by the students, which helped with adjustment of their attitudes to the patients. The contact of the patients hospitalized for prolonged periods with young and healthy students is also considered to have stimulated modification of their human relations. Preparation of process records by student nurses in psychiatric practice is considered to be of major educational importance not only for acquisition of nursing techniques by the students but also for utilization of this opportunity for improving the patients' conditions.

Bull. Sco. Allied Med. Sci., Nagasaki Univ. 4 :1-8, 1990

Key words: confidence, acceptance, respect, learning, human relations.